

翻訳史から見たポーランドにおける日本文学

藤原, まみ
九州大学大学院比較社会文化学府 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/20619>

出版情報 : 地域健康文化学論輯. 1, pp.59-70, 2009-09-30. Japan Institute for Community, Health, and Culture
バージョン :
権利関係 :

翻訳史から見たポーランドにおける日本文学

藤原 まみ

はじめに

ポーランドでは首都ワルシャワを中心に、茶道・能楽・日本映画・舞踏などの公演やワークショップ、着物や写真などの展覧会、花魁や和菓子についての講演など、様々な日本文化関連の行事が一年中行われており、一般の人々の日本文化に対する関心の高さを示している。しかしながら、これほど様々な日本文化が紹介されているにもかかわらず、日本近・現代文学の分野においては、村上春樹や三島由紀夫以外の作家の翻訳や紹介は現在のポーランドにおいてほとんど行われていない。この現状は、現在のポーランドにおいては、「日本」文学が茶道や能楽程には人々のエキゾチシズムを満足させるものではないことを如実に示していると言えよう。

本稿を執筆している二〇〇九年は、日本とポーランドの国交樹立九十周年にあたる。本稿では、この節目の年にポーランドにおいて日本文学がどのように紹介されてきたかを、翻訳史を中心にふりかえり、今後、ポーランドにおける文化・文学受容とエキゾチシズムとの関係を考える前提としたい。

一：第二次世界大戦以前

ポーランドと日本の接触は、ポーランド・カトリック教会所属のスカルガ(Piotr Skarga)によって十六世紀に始まった⁽¹⁾。しかし、ポーランドに日本文学が紹介されるまでには、それから二世紀程の時を経ねばならなかった。十九世紀になって、フランス、イギリス、オランダ、オーストリアにおける東洋学や日本学の発展に伴い、日本文学がヨーロッパに紹介されはじめた頃、ポーランドでも「日本名文集」がデュヒンスカ(Seweryna Duchńska)によるフランス語からの重訳によって一八七三年に出版された。これがポーランドにおける最初の日本文学紹介である。

その後、貞奴が活躍した川上一座のポーランド公演が高く評価され、日本演劇についても関心が高まり、フランス語訳の為永春水『伊呂波文庫』を改作した『死を期しての忠誠』(一八九六)や、日本文学を歴史や社会との関係において論じたシヴィエンチツキ(Julian Adolf Świecicki)の『図入り・中国・日本文学史』(一九〇一)が出版された。また、一九〇二年にはピウスツキ(Bronisław Piłsudski)が来日し、アイヌ人の習慣や伝統を研究し、優れた業績を残した。

さらに、アジアの小国である日本が大国ロシアと戦った日露戦争(一九〇四～一九〇五)は、ポーランドにおける日本文学への興味をさらに高め、この時期に盛んに日本文学が翻訳されている。その頃に翻訳されたものには、新渡戸稲造の『武士道』(一九〇四、ドイツ語からの重訳)、徳富健次郎の『不如帰』(ポーランド語題名『なみこ』、一九〇五、英語からの重訳)、ラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn)の『心』(Kokoro、一九〇六、ドイツ

語からの重訳)と『知られぬ日本の面影』(*Glimpses of Unfamiliar Japan*、一九〇九)、竹田出雲の『寺子屋すなわち村の学校—幕物日本歴史劇』(一九〇七、ドイツ語からの重訳)などがある。また、ドイツ語を参照しながら詩人のランゲ(A.Lange)は『新体詩抄—日本の新詩人たち』(一九〇七)を、ヤンコフスキ(J.Jankowski)は『袈裟と盛遠』を改作して『袈裟—戯曲的作品と消えゆく風景』(一九一〇)を発表した。

一七九五年にオーストリア、ロシア、プロシアの三国によって分割されたポーランドは、一九一八年に独立を取りもどした。そして、一九一九年にはライプツヒ市大学で日本学の博士号を取得したリヒテル(Bogdan Richter)教授の元、ワルシャワ大学で日本語講座が開講された。しかしながら、一九一九年から一九二二年は国の復興に忙しく、日本に関する書物は稀にしか出版されていない。日本文学関係の出版は一九二三年以降始まり、まず、当時人気のあったラフカディオ・ハーン作品集『怪談』(*Kwaidan*)『東の国から』(*Out of the East*)『仏の畑の落穂』(*Gleanings in Buddha-Fields*)などから抜粋して作品が紹介された。また、ユシキエヴィッチ(M. Juszkiewicz)によって、日本の童話、神話、民話などが多く発行され人々の関心をひいた。しかしながら、現在のポーランドでは、ラフカディオ・ハーンへの関心はあまり高いとは言えず、管見によれば、ハーン受容についての研究などはほとんどなされていない状態である。

日本政府がその後ドイツへと接近していく政治状況の下、日本文学への関心はあまり発展することはなかった。しかし、一九三七年の十一月に週刊誌「文学ニュース」(*Wiadomości Literackie*)が日本特集号を発行したことは特筆に値する出来事であろう。谷川徹三、加藤朝鳥、佐々木信綱、外川秋骨、河竹繁俊、伊原青々園らの日本文学についての論文に加え、長谷川如是閑、鈴木大拙、岡本かの子らが寄稿したこの特集号は、充実した内容のものであった。

二：第二次大戦以降から現在

第二次大戦後、ポーランドにおける日本文学研究は著しい発展を遂げる。ワルシャワ大学東洋学研究所(現、東洋学部)日本・韓国学科教授であったコタンスキ(Wiesław Kotański 1915-2005)と、同学科の現教授であるメラノヴィッチ(Mikołaj Melanowicz)の両氏は、この発展に大いに貢献したポーランド随一の日本文学研究家である。

コタンスキ氏による日本文学の翻訳と研究は、古典から近代までの、短歌など伝統的な短詩、能狂言などを含めた、極めて広範囲にわたったものである。中でも、一九七二年から始めた『古事記』の全訳(2)は、ポーランドにおける日本文学翻訳史の中でも、最も重要な業績のひとつであると言えよう。『古事記』の翻訳を初めて以降、彼は「日本風宇宙進化論(3)」、「言霊信仰と古事記の誤解問題(4)」、「古事記における神名(5)」、「古事記における神名と人名に伴う俗名(6)」、「日本古代歌謡の解明(7)」、「原初に現れた神々の天命。古事記における言語学的考察(8)」など、『古事記』の言葉に関わる論文を多数発表している。

メラノヴィッチ氏はポーランドにおける日本近・現代文学研究の第一人者として、一九六〇年から多くの翻訳や論文を発表している。孤独をキーワードに宮沢賢治研究を始めた彼は、次に、萩原朔太郎も視野に収めながら、近代化される日本と日本人の絶望についての研究を進めた。一九七三年には夏目漱石の「こころ」を翻訳し、次いで谷崎潤一郎、安

部公房、大江健三郎の作品を精力的に翻訳していった。また、一九九四年から一九九六年にかけて、全三巻の『日本文学』の出版（第一巻は六世紀から十九世紀、第二巻は二十世紀散文、第三巻は二十世紀詩と演劇(9)）、『日本文学におけるナレーション。日本の現代作家の研究(10)』など、多くの日本文学専門書を出版している。さらに、「言葉の革命。日本のアヴァンギャルド文学の意義と可能性。安部公房の死をいたんで(11)」「『吉野葛』—伝統が現在に及ぼす影響についての物語(12)」など、ポーランドの雑誌に加え、日本やその他の国での発表媒体にも多くの論文を寄稿し、精力的な研究活動を今現在も行っている。最近では、向田邦子や山田太一などによるテレビドラマの脚本などにも研究対象を広げている。

ところで、コタンスキ、メラノヴィッチの両氏が所属している（いた）ワルシャワ大学東洋学部日本・韓国学科は、ポーランドにおける日本文学研究における一大拠点であり、ここから多くの研究者、翻訳者が輩出している。少なくとも現在までは、ワルシャワ大学日本学科の動向が、おおむね、ポーランドにおける日本文学研究の傾向を左右していると言える。そこで、ここで簡単にワルシャワ大学における日本文学研究の構造的特徴について述べておこう。

ポーランドの大学では文学部の中に日本文学科を有する大学はなく、日本文学研究は、日本学の一研究分野という位置づけがなされている。ちなみに、ポーランドではワルシャワ大学の他に、クラクフ市のヤギェウォ大学、ポズナニ市のアダム・ミツケヴィッチ大学、そして、二〇〇七年にはトルン市のコペルニクス大学に日本学科が開設されている。

ワルシャワ大学の日本学は文献学の範疇としてその歴史を始めたが、徐々にその性質を変えてきている。現在のワルシャワ大学日本学科のスタッフは、日本の歴史を専攻とする学科長を筆頭に、歴史学が4人、言語学が1人、宗教学が1人、古典文学・文化が1人、美学（近代文学、伝統芸能、映像文化など文化全般を網羅する）が1人、日本文学が1人、茶道師範が1人に、日本人の日本語講師が加わった構成となっている。学生たちは入学後、これらの分野のすべての授業を受講した後に、それぞれの専門を決定していく。残念ながら近年、近・現代日本文学を専門として選択する学生数が減ってきているのが現状である(13)。しかし、ポーランドにおける日本文学の翻訳者の大半が、ワルシャワ大学出身者で占められている状況は変わっていない。今後、学生時代に文学とあまり関わりを持たなかった翻訳者の占める割合が、さらに増加していくことが予想される。

ポーランドで翻訳されている作家達は、川端康成、大江健三郎などのノーベル賞受賞作家や、三島由紀夫、安部公房、村上春樹など、世界的に認知され海外の日本研究者の間で盛んに取り上げられている作家が中心である。しかし、そのような状況の中で、独自の選択によって日本文学を翻訳し出版している出版社も存在している。そのうちのひとつである **Waneko** は、一九九七年に、日本人の綿貫健一郎、妻のアレクサンドラ、マルティナ谷口氏によって、ポーランドで二番目に設立された日本マンガ専門翻訳出版会社である。この出版社はマンガ以外に金子みすずの詩集「私と小鳥と鈴と」や、日本語未習者向けのかたかなやひらがなの教本などを出版し、日本マンガ読者層の拡大を図っている。また、二〇〇六年に設立された翻訳出版や語学研修などを手掛けるポーランド・日本間のコーディネート会社 **Hanami** は、西条奈加の「金春屋ゴメス」など、いわゆるファンタジー・ノベルと言われている分野の作品を積極的に翻訳出版している。これら二社の翻訳は、アカデミズムとは一線を画した視点から日本文学を翻訳紹介している。しかしながら、それほど

人々の関心を引いているとは言えない現状である。

ところで、現在のポーランドにおいて、最も読まれている日本文学は村上春樹である。一九九八年以降村上春樹の作品はコンスタントに翻訳され続けており、二〇〇三年以降はアメリカ在住のエリオット (A. Zielińska-Elliot) がほとんどの翻訳を手掛けている。村上春樹の新刊本は一般の書店で平積みされる程の人気があり、日本にことさらに興味を持っていない一般の読者にも受け入れられているようである。この状況は日本のアニメが、日本のものであると知らずに一般に享受されている実態と類似しており、村上春樹作品の持つ「世界性」と「日本性」との関係について考えさせられる。しかしながら、ポーランドにおける日本文学紹介・研究が翻訳と密接に関わっている状況を鑑みると、翻訳が村上春樹のみに占められている観のある今の状況には憂うべき点もあると言えないだろうか。

おわりに

以上、ポーランドにおける日本文学の実態を、翻訳史を中心に概観してきた。ポーランドにおける本格的な日本文学紹介・研究が、第二次世界大戦以降、傑出した日本文学研究者们によってなされたことが了解されたことと思う。しかし、依然としてポーランドにおいて日本文学は、(村上春樹は唯一の例外であるが) 一部の好事家のための、マイナーな文学であり、日本文学研究者の数も少ないのが現状である。最近では、日本企業のポーランドへの進出が盛んに行われ、その結果、トルン市のコペルニクス大学にポーランドにおいて四番目の日本学科が開設されたり、日本学科がない大学にも次々に日本語講座が開設されたりしている。日本語を習得したいという学生が、必ずしも、日本文学に興味を持つわけではないことは自明のことではあるが、このような日本語学習者達の中から、優れた日本文学研究者が輩出し、ポーランドにおける日本文学紹介・研究の質がより深まることを希望してやまない。

資料 一九〇〇年から二〇〇八年にポーランドで出版された日本文学

出版年	作者	題名	翻訳者	出版元
1991	Ryugo Akase	熱砂の沈黙	Piotr Lewiński	ワルシャワ KAW
1991	和泉式部 小野小町	Świat miłości	Marek Has	クラクフ Miniatura
1993	Wstęp	Japońskie	Marek Has	クラクフ Miniatura

	Marek Has	wiersze śmierci		
1993	こやま峰子	Wiersze kwiatowe	Michi Tsukada ; kons. Łucja Danielewska	Nowy Tomyśl Biblioteka MiG
1995	谷崎潤一郎	瘋癲老人日記	Mikołaj Melanowicz	ワルシャワ Wilga
1995	大江健三郎	万延元年のフットボール	Mikołaj Melanowicz	ワルシャワ Wilga
1995	安部公房	砂の女	Mikołaj Melanowicz	ワルシャワ Wilga
1995	安部公房	密会	Mikołaj Melanowicz	ワルシャワ Wilga
1996	遠藤周作	深い河	Mikołaj Melanowicz	ワルシャワ Muza
1996	谷崎潤一郎	武州公秘話	Krystyna Piorkowska	ワルシャワ PIW
1997	wybor	Barwy kwiatow barwy czasu :	Michi Tsukada	Nowy Tomyśl Biblioteka

		wiersze poetek i poetow japońskich		MiG
1997	三島由紀夫	金閣寺	Anna Zielińska-Elliott	ワルシャワ Wilga
1998	村上春樹	世界の終りとハード ボイルド・ワンダー ランド	Anna Horikoshi	ワルシャワ Wilga
1998	別役実、三島 由紀夫、太田 省吾、佐藤信	あたしのビートル ズ、他	E. Śeromska, B.Kubiak Ho-Chi, J.Filipek, H. Lipszyc J.Rodowicz, Okubo C.	ワルシャワ Dialog
1998	安部公房	時の崖	M. Melanowicz et al.	ワルシャワ Wilga
1998	芥川龍之介	或る阿呆の一生、他	Wybor M. Melanowicza	ワルシャワ Dialog
2000	吉村昭	破船	Anna Zielińska-Elliott	ワルシャワ Proszyński i S-ka
2002	井上靖	風林火山	Dorota	Diamond

			Marczewska	Books Bydgoszcz
2002	川端康成	眠れる美女 千羽鶴	Mikołaj Melanowicz	ワルシャワ Muza
2002	太宰治	斜陽	Mikołaj Melanowicz	ワルシャワ Dialog
2003	村上春樹	国境の南、太陽の西	Aldona MoŜdŜyńska	ワルシャワ Muza
2003	三浦清宏	長男の出家	Barbara Słomka	ワルシャワ Dialog
2003	三島由紀夫	鹿鳴館	Beata Bochorodycz	Sęszew IIEOS
2003	村上春樹	羊をめぐる冒険	Anna Zielińska-Elliot	ワルシャワ Muza
2003	村上春樹	スプートニクの恋人	Aldona MoŜdŜyńska	ワルシャワ Muza
2004	村上春樹	ねじまき鳥クロニク ル	Anna Zielińska-Elliot	ワルシャワ Muza
2004	吉本ばなな	キッチン	Anna Zielińska-Elliot	ワルシャワ PIW

2004	川端康成	名人	Katarzyna Jakubiak	クラクフ Znak
2004	鈴木光司	リング	Henryk Lipszyc	ワルシャワ Bielsko Biała Polskie Stowarzyszenie Go , Elay
2004	大江健三郎	芽むしり仔撃ち	Jan Rybicki	ワルシャワ Amber
2005		Chrestomatia współczesnych opowiadań japońskich	Monika Szychulska	ワルシャワ Dialog
2005	金子みすず	私と小鳥と鈴と	opr./tł. Katsuyoshi Watanabe et al.	ワルシャワ Waneko
2005	大江健三郎	個人的な体験	Zofia Uhrynowska	ワルシャワ PIW
2005	Wybor i opr. Henryk	Samurajske wersety	Agnieszka Żuławska-Umeda	ワルシャワ Ludowa

	Socha			Społdzielnia Wydawnicza
2005	Wybor i opr. Henryk Socha	13 pieśni o sake	Wiesław Kotański	ワルシャワ Ludowa Społdzielnia Wydawnicza
2005	村上春樹	ダンス・ダンス・ダンス	Anna Zielińska-Elliott	ワルシャワ Muza
2005	吉本ばなな	TUGUMI (つぐみ)	未詳	ワルシャワ PIW
2006	夏目漱石	吾輩は猫である	Mikołaj Melanowicz	Sosnowiec Inter Media
2006	安部公房	砂の女	Mikołaj Melanowicz	クラクフ Społeczny Instytut Wydawniczy ZNAK
2006	村上春樹	ノルウェイの森	Dorota Marczewska Anna	ワルシャワ Muza

			Zielińska-Elliott	
2006	矢野啓司・ 矢野千恵	Ostrze paragrafu 凶刃	未詳	Bydgoszcz Oficyna Wydawnicza Branta
2006	村上春樹	神の子どもたちはみな踊る	Anna Zielińska-Elliott	ワルシャワ Muza
2006	島田雅彦	自由死刑	Barbara Słomka	ワルシャワ Dialog
2006	Adachi Kazuko	Zasmarkane dziecko bogow i inne baśnie Japońskie	il. Emiko Murata	ワルシャワ Fundacja Nauka I Wiedza
2007	村上春樹	海辺のカフカ	Anna Zielińska-Elliott	ワルシャワ Muza
2007	西条奈加	金春屋ゴメス	Jacek Mendyk	ワルシャワ Hanami
2007	山田太一	異人たちとの夏	Anna Horikoshi	ワルシャワ Muza
2007	村上春樹	アフターダーク	Anna Zielińska-Elliott	ワルシャワ Muza
2007	oprac.	Ryśowe ciasteczko	il. Monika	ワルシャワ

	tekstow Magdalena Malinowska		Szewczyk	Waneko
2008	仁木英之	僕僕先生	Jacek Mendyk	ワルシャワ Hanami
2008	藤原定家	小倉百人一首	Anna Zalewska	ポズナン Wydawnictwo jeżeli p to q
2008	村上春樹	ブラインドウィロ ウ、スリーピングウ ーマン	Anna Zielińska-Elliott	ワルシャワ Muza
2008	三島由紀夫	三島由紀夫作品集	Henryk Lipszyc	ワルシャワ Świat Książki - Bertelsmann Media

- (1) Wiesław Kotoński 「スカルガにおける和語」 'PRACE FIOLOGICZNE' XVIII, 四、一 九六五
- (2) Wiesław Kotoński *Kojiki, czyli Księga dawnych wydarzeń*, PIW, Warszawa 1986
- (3) Wiesław Kotoński *Kosmogonia japońska*, w: Euhemer, 3(97), Warszawa 1975, s.15-32.
- (4) Wiesław Kotoński *The belief in Kotodama and some misinterpretations of Kojiki*, w: European Studies on Japan, Paul Norbury Publications, Tenterden 1979, s. 237-242.
- (5) Wiesław Kotoński *Imiona bogów w "kojiki", najstarszej kronice japońskiej*, w: Euhemer, 3(117), Warszawa 1980, s. 3-13.
- (6) Wiesław Kotoński 「古事記における神名と人名に伴う俗名」『大阪国際大学紀要』、一九九四
- (7) Wiesław Kotoński 「日本古代歌謡の解明」『日本研究』、一九九八
- (8) Wiesław Kotoński 「原初に現れた神々の天命。古事記における言語学的考察」『心霊研究』、二〇〇〇
- (9) M. Melanowicz *Literatura Japońska [T.1] Od VI do Połowy XIX wieku*,

[T.2] *Proza XX wieku*, [T.3] *Poezja XX wieku*, Warszawa: Naukowe PWN, 1994-1996

(10) M. Melanowicz *Japońskie narracje: Studia o pisarzach współczesnej Japonii*,

Kraków: Wyd. Uniwersytetu Jagiellońskiego, 2004

(11) M. Melanowicz 「言葉の革命。日本のアヴァンギャルド文学の意義と可能性。安部公房の死をいたんで」『日本研究 京都会議』III、日文研、一九九四、一〇一～一〇五頁

(12) M. Melanowicz、「『吉野葛』—伝統が現在に及ぼす影響についての物語」谷崎潤一郎シンポジウム、一九九七、六〇～六六頁

(13) 二〇〇七年十月にクラクフで開催された日本学の国際学会において、ワルシャワ大学から文学関係の発表をした者は、当時客員講師として同大学に所属していた論者以外では、メラノヴィッチ教授のみである。それに対し、クラクフのヤギェウォ大学からは幾人かの若い研究者の発表があった。また、二〇〇八年にワルシャワ大学で開催された源氏物語と平安文化をテーマとした学会で、「映画『源氏物語』から考察する『源氏物語』の文学的解釈の新しい可能性」という発表がなされた。しかし、それは原典や日本現代語訳はもちろん、ポーランド語訳、あるいは、マンガを媒介とした『源氏物語』を読むことも、映画『源氏物語』を視聴してもいない者による発表であった。このような「文学的」解釈についての学会発表が可能である点に、現在のワルシャワ大学日本学科が抱える日本文学・文化研究の裾野の狭さが表れているように思えてならない。ちなみに、メラノヴィッチ教授はクラクフ大学でも兼任されており、最近の彼の文学専門書はほとんどクラクフのヤギェウォ大学出版から刊行されている。ポーランドにおける日本文学研究の中心は今後ヤギェウォ大学に変わっていくのではないだろうか。

【参考文献】

- Wiesław Kotański 「ポーランドにおける日本文学の受容」『文学』第五十巻、第十二号、岩波書店、一九八二、一六二頁～一七二頁
- Mikołaj Melanowicz 「ポーランドにおける日本文学—翻訳と研究—」『文学』第四十一号、第五号、岩波書店、一九七三、一〇二頁～一〇六頁
- -----
「ポーランド語になった日本文学」『国際交流』第二五号、一九八〇年、二六頁～三三頁
- -----
「日本文化研究と日本文明学とポーランドにおける日本文学研究」*The IRCJS 20th Anniversary International Symposium 2007* 九頁～一五頁
- Agnieszka Kozyra 「ポーランドのワルシャワ大学における日本学研究」*Beyond Borders: Japanese Studies in the 21st Century In Memoriam Wiesław Kotański*, Warszawa: Nozomi 2007
- Ambasada Japonii w Polsce 'Lista wybranych publikacji japonistycznych 2000-2008'

[The History of Translation of Japanese Literature in Poland]

[FUJIWARA Mami・九州大学大学院博士課程・比較文学、英語圏文学、日本近代文学・ラフカディオ・ハーンの後期再話作品における主にフランス文学を中心としたヨーロッパ文学の影響と日本近代作家によるラフカディオ・ハーン受容]